

令和 7(2025)年度 前期授業評価アンケート分析報告書

概要

本報告は授業評価における各項目の時間的推移や項目間の関係を明らかにした。令和 7(2025)年度の授業評価アンケートでは新たに理解度と推奨度の項目が設けられたため、既往の項目のほかに新規項目との関係も分析対象とした。また関係評価に際し統計量の任意性を減ずるため本報告では平均値に加え中央値を採用した。アンケートの各項目について授業毎に平均値および中央値を算出し、さらにこれらの値を用いて相関係数を計算した。相関係数は全授業のほか、クラスサイズの大小および教養科目と専門科目の区分し、区分毎に値を算出した。その結果、まず主要項目の時間的推移では、①前年度後期と比べ、科目毎の評価(平均値)の平均値および評価(平均値)の中央値から、総合評価(満足度)は 0.1 程度、課題取組(学習時間)は2分から5分ほど増加していた。また、②それ以外の項目からは、令和7(2025)年度もこれまでと同様の学生の学習傾向が続いていることが推定された。つぎに項目間の関係では以下の点が示唆された。①授業の総合評価は授業推奨と正の相関がある。②総合評価は内容理解・資料理解・双方向性・指示・興味関心と正の相関がある。③総合評価と負の相関をする指標には難易度と課題分量があるが、相関係数の絶対値はさほど大きくはない。④クラスサイズが大きい場合には難易度と課題分量は総合評価と負の相関があるが、クラスサイズが小さい場合には負の相関は弱い。⑤専門科目では難易度と学習時間は総合評価にさほど影響しない。このうち、とくに項目間の関係③と⑤からは、履修者の専門性向上を目指して難易度を高め、課題分量を増加させるといった学習負荷をかけることは、学生からは否定的なこととして認識されていない可能性があることが分かる。他方で教養科目ではこのような学習負荷は総合評価に影響しており、難易度や課題量をどのように調整するかが課題となる。

第1節 はじめに

千葉経済大学(以下、本学)では、教育内容や教育方法の改善・充実を図ることを目的として授業評価アンケートを実施している。授業評価アンケートについては様々な意見があるが、現在多くの日本国内の大学においては、本学と同様の授業評価アンケートが実施されている。本学ではアンケート結果をもとに授業評価の高い教員を表彰して授業改善への動機づけを行い、また評価の高い教員による教授法の事例発表を通じて、授業内容の改善の一助としている。

本学では、前期および後期において授業評価アンケートを実施することとしている。FD委員会担当者によって授業評価アンケート回答の単純集計を行うだけでなく、FD委員会内の授業評価アンケートワーキンググループにて集計および分析が行われている。そして、これらの分析をFD委員会で確認しFDに活用することとしている。結果は教授会において学内に伝達されるほか、Webを通して学外にも公開されている。

本報告書は、ワーキンググループによる2025年度前期授業評価アンケート回答の分析結果を記したものである。本アンケートは授業の改善・充実を目的とするものであることから、授業単位で集計を行い分析している。令和 7(2025)年度においては、過去の年度に行ってきた各アンケート項目の平均値の算出・平均値の時間的推移・各項目の平均値を用いた相関だけでなく、各アンケート項目の中央値の算出および中央値を用いた相関を算出している。これらの結果から、授業改善に資する情報を抽出した。

第 2 節ではアンケート方法およびその分析方法について記す。第 3 節では第 2 節で記した分析方法による結果を記す。第 4 節は結果の議論および結論に充てる。

第2節 授業評価アンケートの実施方法と分析方法

第2.1節 授業評価アンケートの実施方法

授業評価アンケートの実施期間・方法・対象を表 1 に示す。令和 7(2025)年度の前期授業評価アンケートは令和7(2025)年 7 月 7 日(月)から令和7(2025)年7月25日(金)(第13週～第15週)に実施した。アンケート実施科目は前期開講科目および通年開講科目(集中講義を含む)である。なお「ゼミナール」および「卒業論文」での実施は適切な結果が得られないと想定されたことから、「ゼミナール」および「卒業論文」はアンケート対象から除外した。またアンケートは学内ポータル in Campus のアンケート機能を用いたオンラインアンケートとし、各授業内で実施した。

アンケート項目と内容を付録:表 1 に示す。2025年度より新規の設問として設問11と設問12が追加された。設問 2 から設問 8、および設問11から設問 13 までの回答は、1 から 5 までの数値に変換されて保持されている。記述を除く他の設問項目も数値化され、保持されている。

実施期間	令和7(2025)年 7 月 7 日(月)から令和7(2025)年7月25日(金)(第13週～第15週)
方法	オンライン(学生ポータルのアンケート機能による)
対象	ゼミナール・卒業論文を除く全開講科目(履修者がいない科目を除く)

表 1 授業評価アンケートの実施期間・方法・対象

第2.2節 分析方法

本アンケートは授業改善のためのアンケートであるから、授業毎の情報を抽出することとする。具体的には数値化した項目について平均値と中央値を用いて評価する。中央値はロバストな指標であり¹、順序尺度²のデータに対しても問題なく用いることが可能である。その一方で、平均値に比べ、中央値は分布の情報を反映しにくい。そこで本アンケートで得られる数値は順序尺度ではあるが、実務的な面から平均値も用いることとした³。以下では代表値といった場合、平均値と中央値の何れの場合も意味することとする。

まず、本アンケートでの基礎情報として、履修者数・回収率・興味関心・難易度・総合評価(満足度)・課題取組(学習時間)に関する科目の平均値から代表値を算出した。そして、これまでの数値と比較して時間的な変化の有無を確認した⁴。

つぎに、アンケート項目の関係性を明らかにするため、項目間の相関係数を計算した。その際に、科目の性質に依拠した情報を抽出するため、全科目を対象とした係数だけでなく、特定の区分に属する科目群での相関係数も計算することとした。区分としては(A)全授業、(B)履修者数(20名以上か、20名未満か)、(C)回答数(20回答以上か、20回答未満か)、(D)専門科目と教養科目、を想定し、これらの区分で計算を行った。また相関係数として各授業の平均値を用いたピアソンの相関係数だけでなく、各授業の中央値を用いたスピアマンの相関係数を算出し、項目間の関係を検討した。

¹ 中央値は極端な評価の影響を受けにくいいため、授業の評価として妥当である。

² 平均値が明確な意味をもつにはデータが間隔尺度または比率尺度でなければならない。

³ 例えば評価が「3,3,3,3,3」である場合と「3,3,3,5,5」である場合の区別を中央値ではできない。

⁴ 2024年度よりゼミナールを除外しているため、その解釈には注意を要する。

第3節 結果

第 3.1 節 アンケート回答の基礎データ

アンケートの実施科目数は履修者数のいない科目を除いた173科目である。これらの科目の履修者数はのべ10,219名である。アンケートを実施した結果、学生からの全回答数は4,451件であった。

このうち回答数が0であった科目は、分析対象から除外した。これはアンケート項目の数値が得られていないことから、平均値や相関係数を計算に含めることが不適切であるためである。このような科目の場合、履修者数および回答率には含める余地もあるが、アンケートの実施状況や回答状況などが適切でなかった可能性もあることから、履修者数および回答率のどちらの計算にも含めないこととした。

表2に本分析の基礎データを示す。分析対象となる科目数は169科目であり、これらの科目の履修者数はのべ10,210人である。回答数は先に記した4,451件である。

分析対象科目数(回答数0の科目を除外)	169科目
分析対象科目履修者数	10210名
アンケート回収数	4451件

表2 分析対象科目・履修者数・アンケート回収数

このデータをもとに、各項目の代表値の推移や項目間の関係を推定することとした。

第 3.2 節 主要項目の科目平均値に対する平均値と科目平均値に対する中央値

表3に履修者数・回収率・興味関心・難易度・総合評価(満足度)・課題取組(学習時間)4に関する科目の平均値に対する平均値と、科目の平均値に対する中央値の経年変化を示す。ここで科目平均の平均値とは、各科目における回答の平均値に対して平均値をとったものである。すなわち、各科目 L の項目 j に関する平均値を L_j とするとき、科目平均の平均値 $E(L_j)$ は

$$E(L_j) = \frac{1}{N} \sum_{j=1}^N L_j$$

である。ここに N は授業数である。同様に科目平均の中央値とは、上記 L_j の全科目数 N に対する中央値を意味する。

項目	履修者数		回答率		興味関心		難易度		総合評価(満足度)		学習時間	
	履修者数 平均	履修者数 中央値	回答率 平均の平均	回答率 平均の中央値	興味関心 平均の平均	興味関心 平均の中央値	難易度 平均の平均	難易度 平均の中央値	総合評価(満足度) 平均の平均	総合評価(満足度) 平均の中央値	学習時間 平均の平均	学習時間 平均の中央値
2021年度前	37.79	15	0.783	0.830	4.140	4.140	3.750	3.770	4.190	4.210	42.11	38.26
2021年度後	37.21	13	0.758	0.786	4.170	4.160	3.780	3.790	4.190	4.180	48.06	43.88
2022年度前	37.60	15	0.603	0.579	4.138	4.116	3.631	3.656	4.141	4.143	59.53	53.33
2022年度後	37.07	15	0.560	0.545	4.157	4.167	3.731	3.727	4.177	4.185	60.68	56.46
2023年度前	39.89	15	0.616	0.618	4.119	4.167	3.697	3.700	4.143	4.125	53.38	48.75
2023年度後	37.16	14	0.485	0.500	4.187	4.182	3.710	3.714	4.201	4.231	59.46	50.00
2024年度前	59.13	35	0.500	0.511	4.122	4.140	3.730	3.720	4.090	4.130	45.60	42.40
2024年度後	51.61	29	0.494	0.500	4.191	4.221	3.720	3.741	4.221	4.250	50.43	45.00
2025年度前	60.41	39	0.534	0.534	4.239	4.179	3.732	3.714	4.224	4.231	51.75	45.00

表3 基礎項目の時間的推移 学習時間は課題取組時間を意味するが、ここでは従来の用語「学習時間」を使用した。

表 3 に示された結果から、総合評価(満足度)が 0.1 程度、学習時間が2分から5分増加していることが分かる。また総合評価と課題取組(学習時間)以外の項目からは、令和7(2025)年度もこれまでと同様の学生の学習傾向が続いていることが示唆される。

第 3.3 節 項目間の相関

項目間の関係を調べるため、「項目の平均値」の相関について調べた。対象とする授業の区分は(A)ゼミナール・卒業論文を除く全授業、(B)履修者数(20名以上か、20名未満か)、(C)回答数(20回答以上か、20回答未満か)、(D)専門科目と教養科目、である。ただし回答数 0 の科目は除外されている。また相関を計算する際に利用する数値は平均値と中央値の双方を用いた。相関係数は平均値に関してはピアソンの相関係数を算出し、中央値に関してはスピアマンの相関係数を算出した。分析には python (ver. 3.8.3)、pandas (ver. 1.0.5)、matplotlib (ver. 3.2.2)、seaborn (ver. 0.10.1)、japanize_matplotlib (ver. 1.1.3)を利用した。

第 3.3.1 節 平均値の相関

本小節では項目間の関係を明らかにするため、平均値の相関を算出する。相関係数としてピアソンの相関係数を用いることにする。本アンケートのデータは順序尺度であるため平均値の算出に理論的な問題がある。しかしデータの分布情報を多少は取り込めるため、実務的な側面から、本節では平均値を用いることとする。正の相関に関しては 0.6 を目安として用いることにする。相関の強弱に関して言及する際は、表 4 に従うものとする。

$ r < 0.2$	相関なし
$0.2 \leq r < 0.4$	弱い相関
$0.4 \leq r < 0.7$	中程度の相関
$0.7 \leq r \leq 1.0$	強い相関

表 4 相関係数 r の絶対値と強弱の評価
(ギルフォードの基準)

本報告では相関をヒートマップで図示した(平均値は図 1～7、中央値は図 8～14)。ヒートマップはアンケートをもとに興味関心(Q2)、難易度(Q3)、教員からの指示:指示(Q4)、双方向性(Q5)、LMS⁵(Q6)、資料の理解度:資料理解(Q7)、課題分量(Q8)、予習復習時間(Q9)、課題の取組時間:取組時間(Q10)、内容理解(Q11)、授業の推奨度:授業推奨(Q12)、総合評価(Q13)の項目からなる。なお以下、項目はコロン以下の語句で統一して表記した。

図 1 は区分(A)全授業に対する平均値を用いた相関を示したヒートマップである。総合評価(Q13)は授業推奨(Q12)、内容理解(Q11)、資料理解(Q7)、双方向性(Q5)、指示(Q4)、興味関心(Q2)と、値として0.6以上の正の相関を持っていることが分かる。一方で課題分量(Q8)および難易度(Q3)は絶対値が 0.1 以上となる負の相関をもっている。難易度は負の相関を示してはいるが、表 4 の基準からいえば「相関なし」となる。

図 2 は履修者が区分(B)20名以上の授業における平均値の相関である。総合評価(Q13)との正の相関については全授業の場合と大差ない。しかし、総合評価(Q13)と負の相関については難易度(Q3)・課題分量(Q8)とも絶対値が大きくなっている。また難易度(Q3)と内容理解(Q11)、難易度(Q3)と授業推奨(Q12)、および課題分量(Q8)と授業推奨(Q12)の間に負の相関がみられる。その他の項目についても変動はあるが、評価は変わらない程度の変化である。

⁵ Learning Management System のこと。

図 3 は区分(B)履修者が20名未満の授業における平均値の相関である。総合評価(Q13)は授業推奨(Q12)、内容理解(Q11)、資料理解(Q7)、双方向性(Q5)、指示(Q4)、興味関心(Q2)に加え、総合評価(Q13)とLMS(Q6)が弱い正の相関となっている。また負の相関はほとんど見られなくなっていることも分かる。

図 4 は区分(C)回答数 20 以上の授業における平均値の相関である。履修者が20名以上の授業における平均値の相関の場合と傾向は変わらないが、相関がより強く出ていることが分かる。とくに総合評価(Q13)と負の相関となっている難易度(Q3)と課題分量(Q8)は、登録者20名の場合より強い負の相関となっている。同様に難易度(Q3)と内容理解(Q11)および課題分量(Q8)と授業推奨(Q12)の間においても同様の傾向がみられる。

図 5 は区分(C)回答数 20 未満の授業における平均値の相関である。回答数 20 未満の授業の相関関数の結果は、履修者が20名未満の授業における平均値の相関と大差ないことが分かる。

図 6 は区分(D)教養科目の授業における平均値の相関である。基本的な相関の傾向は区分(A)～(C)と変わらず、総合評価(Q13)は授業推奨(Q12)、内容理解(Q11)、資料理解(Q7)、双方向性(Q5)、指示(Q4)、興味関心(Q2)と高い正の相関を示している。また総合評価(Q13)は課題分量(Q8)および難易度(Q3)と負の相関を示している点も変わらない。難易度(Q3)は双方向性(Q5)・内容理解(Q11)・授業推奨(Q12)に負の相関となっている。加えて課題分量(Q8)も興味関心(Q2)・指示(Q4)・双方向性(Q5)・内容理解(Q11)・授業推奨(Q12)と負の相関となっている。

図 7 は区分(D)専門科目の授業における平均値の相関である。正の相関に関する傾向は教養科目の場合と変わらない。特筆すべきは難易度(Q3)や課題分量(Q8)で見られていた負の相関が消失していることである。全般的に負の相関となっているものは多くなく、LMS (Q6) と難易度(Q3)・予習復習時間(Q9)・取組時間(Q10)が弱い負の相関となっている。

第 3.3.2 節 中央値の相関

本小節では、回答項目毎に算出した中央値を用い、分析した結果を示す。平均値は良く使われる指標であり、分布の影響を多少は取り入れている。しかし、平均値が意味を持つにはデータが間隔尺度でなければならない。また平均値は外れ値の影響を受けやすい。そこで本小節では順序尺度であれば利用できる中央値を用いる。中央値は分布の情報を取り込むことは十分にできないが、ロバストであることから極端な評価の影響を避けることができる。以下では中央値からスピアマンの相関係数を求めた結果を示す。本小節では以下に見るように、中央値を用いた相関係数の絶対値が平均値を用いた相関係数の絶対値より小さめに出ることを考慮し、正の相関について 0.5 以上のものを確認する。

図 8 は区分(A)全授業における中央値の相関を示したヒートマップである。まず全般的に、中央値を用いた相関係数は平均値を用いた相関係数より小さいことが分かる。基本的な相関の傾向は平均値と同様である。総合評価(Q13)との相関係数が 0.5 以上のものは、授業推奨(Q12)、資料理解(Q7)、双方向性(Q5)、指示(Q4)、興味関心(Q2)となる。さらに相関関数の値として平均値と同様の基準である 0.6 を採用した場合は、授業推奨(Q12)、指示(Q4)、興味関心(Q2)のみが残る。総合評価(Q13)と負の相関を示すものは難易度(Q3)であるが、その値は-0.17 であり、表 4 の基準では「相関なし」となる。弱い負の相関を示す関係には難易度(Q3)と授業推奨(Q12)がある。

図 9 は区分(B)履修者数が20名以上の授業における中央値の相関である。基本的な傾向は区分(A)全授業を対象にした場合と変わらない。相関係数の値が 0.5 以上であることを条件とする場合は、総合評価(Q13)

と授業推奨(Q12)、指示(Q4)、興味関心(Q2)が正の相関を持つこととなる。内容理解(Q11)、資料理解(Q7)、双方向性(Q5)も比較的大きめの正の相関関係となる。一方、負の相関関係の場合、相関係数の絶対値が全授業の場合よりやや大きくなる。総合評価(Q13)とは難易度(Q3)が弱い負の相関を持つ。また難易度(Q3)は指示(Q4)、内容理解(Q11)、授業推奨(Q12)と弱い負の相関をもち、区分(A)全授業の相関係数より小さな相関係数(絶対値では大きな相関係数)となっている。

図 10 は区分(B)履修者数が20名未満の授業における中央値の相関である。総合評価(Q13)と正の相関をもつ項目は、授業推奨(Q12)、内容理解(Q11)、資料理解(Q7)、双方向性(Q5)、指示(Q4)、興味関心(Q2)である。係数の値は総じて履修者数が20名以上の場合より大きくなっている。また負の相関が総合評価(Q13)と難易度(Q3)でみられるものの、表 4 の基準によれば「相関なし」となる。授業推奨(Q12)と難易度(Q3)も負の相関ではあるが、同様に「相関なし」と判定される。また課題分量(Q8)・予復習時間(Q9)・取組時間(Q10)と明確に正の相関になっている。

図 11 は区分(C)回答数が 20 以上の授業における中央値の相関である。総合評価(Q13)は授業推奨(Q12)、資料理解(Q7)、指示(Q4)と値が0.5 以上の正の相関となっている。また内容理解(Q11)、双方向性(Q5)、興味関心(Q2)も正の相関となっていることが分かる。弱い負の相関となっている項目は難易度(Q3)があげられる。難易度(Q3)は授業推奨(Q12)や内容理解(Q11)とも弱い負の相関となっている。課題分量(Q8)も授業推奨(Q12)・興味関心(Q2)と弱い負の相関にある。すなわち興味関心があるのにも関わらず課題分量の多さは望まないといった関係になっている。

図 12 は区分(C)回答数が 20 未満の授業における中央値の相関である。総合評価(Q13)は授業推奨(Q12)、資料理解(Q7)、指示(Q4)と値が0.5 以上の正の相関となっている。また内容理解(Q11)、双方向性(Q5)、興味関心(Q2)も正の相関となっていることが分かる。総合評価(Q13)は難易度(Q3)と負の相関となっているが、評価基準からは「相関なし」と判定される。難易度(Q3)は授業推奨(Q12)とも負の相関関係になっており、この二つの間の相関係数の絶対値は難易度(Q3)と総合評価(Q13)の相関係数の絶対値より大きい。

図 13 は区分(D)教養科目における中央値の相関である。総合評価(Q13)は授業推奨(Q12)、資料理解(Q7)、双方向性(Q5)、指示(Q4)、興味関心(Q2)と高い正の相関を示している。また内容理解(Q11)とも正の相関をしている。一方、総合評価(Q13)と難易度(Q3)が弱い負の相関を示している。取組時間(Q10)とも負の相関になっているが、評価基準からは「相関なし」となる。難易度(Q3)は授業推奨(Q12)、双方向性(Q5)などと負の相関となっている。

図 14 は区分(D)専門科目における中央値の相関である。総合評価(Q13)は授業推奨(Q12)、資料理解(Q7)、指示(Q4)、興味関心(Q2)と正の相関となっている。また内容理解(Q11)、双方向性(Q5)とも(0.5 未満ではあるが)正の相関をしている。特筆すべきは、総合評価(Q13)と難易度(Q3)は「相関なし」と判定できるまでに関係性が減じられていること、また課題分量(Q8)に至っては総合評価(Q13)と正の相関になっていることがあげられる。評価基準上は「関係なし」ではあるが、取組時間(Q10)も総合評価(Q13)と正の相関になっている。特徴的なものとしては LMS (Q6)があり、難易度(Q3)・課題分量(Q8)・取組時間(Q10)と負の相関になっている。

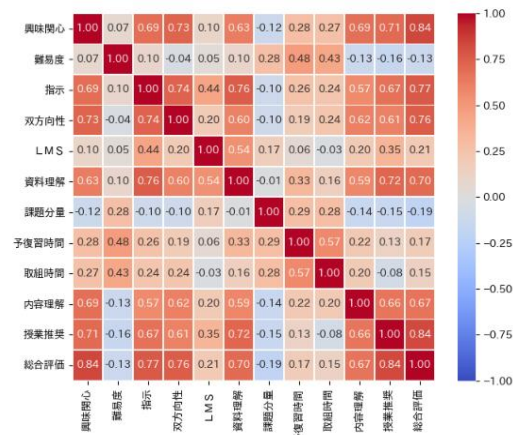


図 1 全授業における項目の平均値の相関

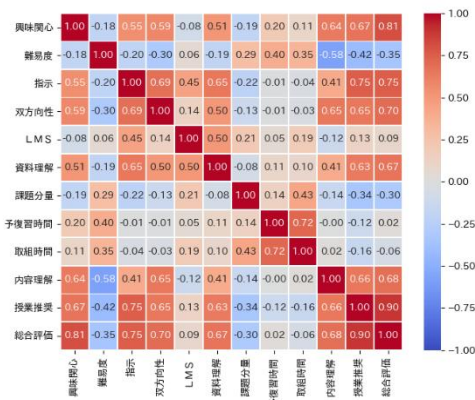


図 2 登録者が20名以上の授業における平均値の相関

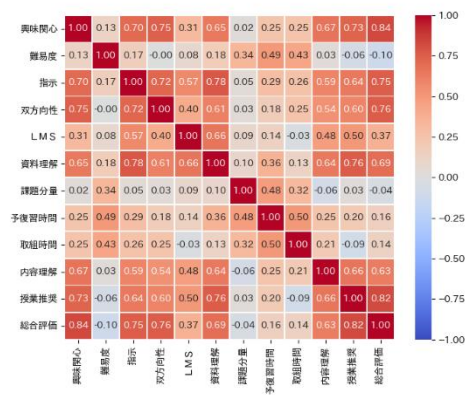


図 3 登録者が20名未満の授業における平均値の相関

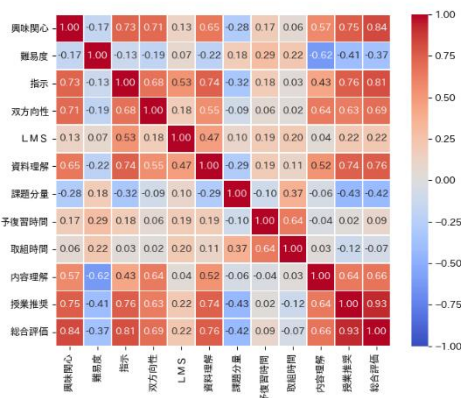


図 4 回答数 20 以上の授業における平均値の相関

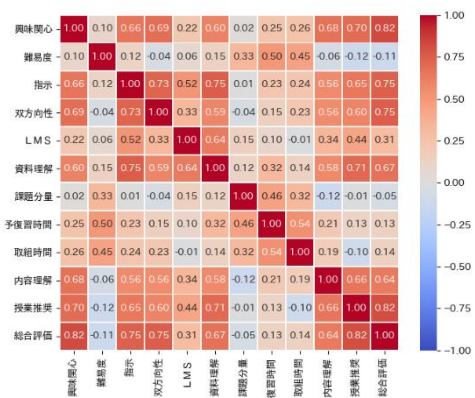


図 5 回答数が 20 未満の授業における平均値の相関

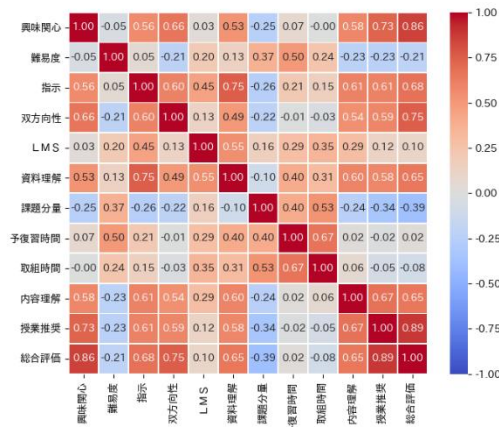


図 6 教養科目における平均値の相関

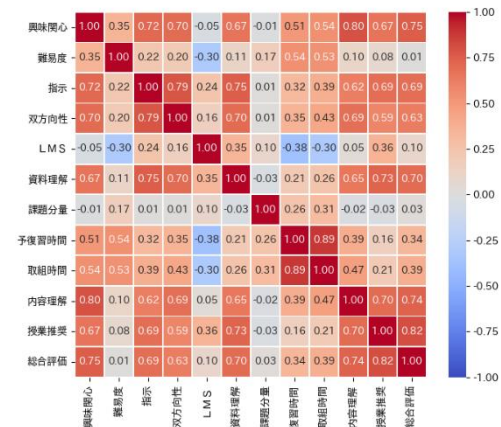


図 7 専門科目における平均値の相関

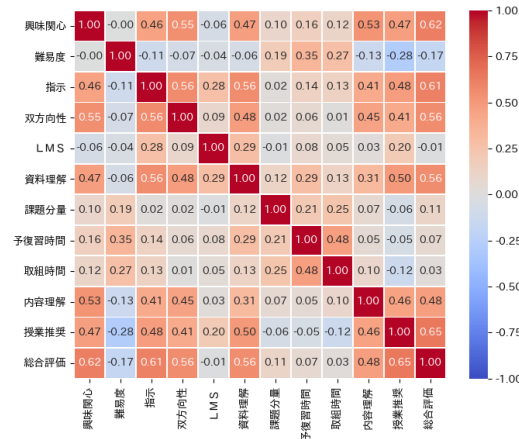


図 8 全授業における中央値の相関

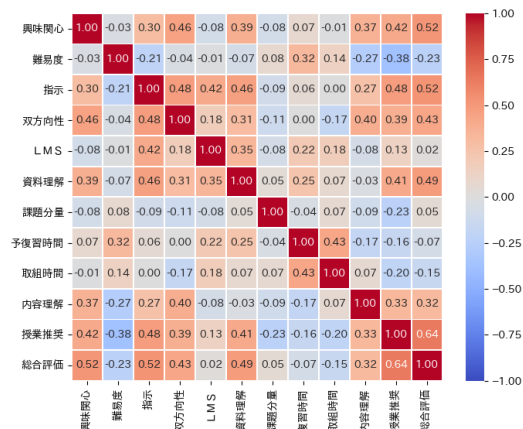


図 9 履修者数が 20 名以上の授業における中央値の相関



図 10 履修者数が 20 名未満の授業における中央値の相関

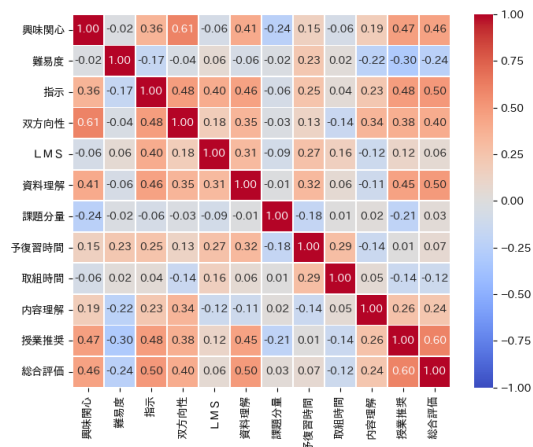


図 11 回答数が 20 以上の授業における中央値の相関

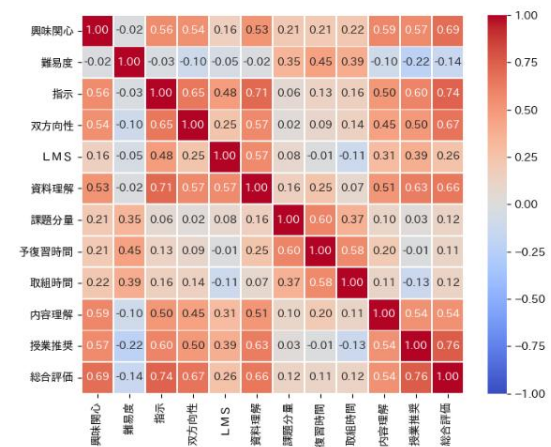


図 12 回答数が 20 未満の授業における中央値の相関

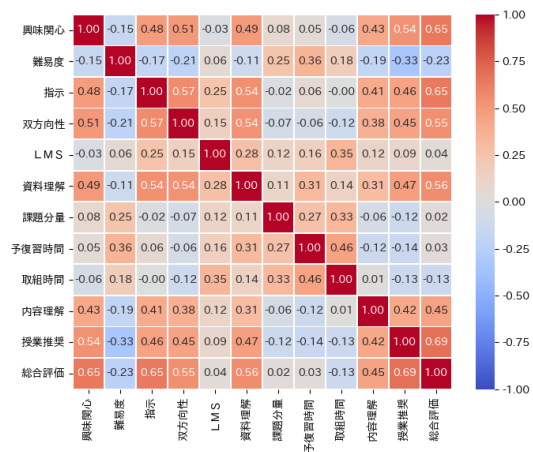


図 13 教養科目における中央値の相関

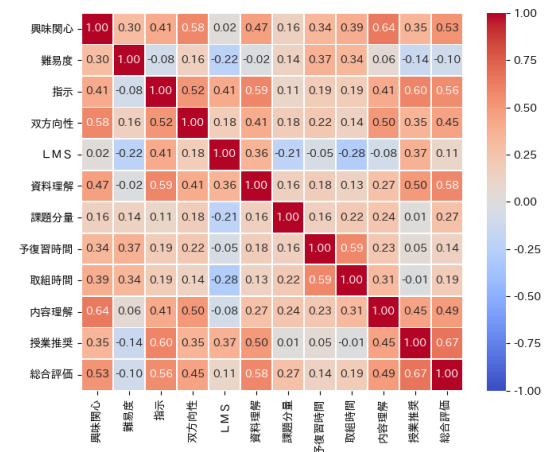


図 14 専門科目における中央値の相関

第4節 議論と結論

本報告では授業評価における各項目の時間的推移や項目間の関係を検討した。分析では本年度新たに授業評価アンケートに加えられた理解度の項目および推奨度の項目も含めた評価を行った。また令和7(2025)年前期に実施された授業評価アンケートから科目毎の評価(平均値)の平均値、および評価(平均値)の中央値を算出した。さらに算出した平均値および中央値を用いてアンケート項目間の相関係数を算出した。平均値からピアソンの相関係数を算出し、中央値からスピアマンの相関係数を算出した。そして授業の特性を明らかにするため、相関係数の計算では、(A)ゼミナール・卒業論文を除く全授業、を対象とするだけでなく、(B)履修者数(20名以上か、20名未満)、(C)回答数(20回答以上、20未満か)、(D)教養科目か専門科目、で区分し、これらの区分ごとに相関係数を算出した。

まず各項目の時間的推移について、過去のアンケート結果を用いながら検討した。科目毎の評価(平均値)の平均値および評価(平均値)の中央値は、前年度同時期のアンケート結果と比較して、総合評価(満足度)が0.1程度、課題取組(学習時間)が2分から5分ほど増加している。この増加が一時的なものか、あるいは誤差であるかは、次年度以降の数値を確認し判断する必要がある。履修者数・回答率・興味関心・難易度については、前年度と同程度の数値である。このことから、本年度もこれまでと同様の学生の学習傾向が続いていると考えられる。

本報告で採用した相関係数の影響については次の結果が得られた。平均値を用いたピアソンの相関係数による相関の傾向と、中央値を用いたスピアマンの相関係数による相関の傾向は大きくは変わらず、相関の強さについては差がみられた。このことは相関関係の抽出についてどちらの量であってもよいことを示唆するが、相関の強さについては注意を払う必要があることを意味する。このことを踏まえたうえで相関関係を理解する必要がある。

つぎに項目間の関係について検討した。ゼミナール・卒業論文を除く全科目を対象として相関関係を調べたところ、授業の総合評価は授業推奨と正の相関があることが示唆された。正の相関となることは妥当であるが、平均値を用いた場合と中央値を用いた場合で相関係数の値にやや差がみられており、総合評価が授業の推奨に直接的に結びついていない可能性もある。また総合評価は内容理解・資料理解・双方向性・指示・興味関心と正の相関があることが示唆された。この関係はこれまで授業評価アンケートでも示唆されてきたことである。総合評価と負の相関をする指標としては難易度と課題分量があるが、相関係数の絶対値は大きくはなく「相関なし」と判定される程度の大きさである。すなわち全体としては難易度と課題分量が総合評価に決定的な役割を果たしてはいないようである。

クラスサイズによる傾向を明らかにするため、授業を分類して同様の分析を試みた。履修者数が20名以上および回答数が20以上は比較的クラスサイズが大きい授業に相当する。どちらも平均値・中央値ともに傾向が類似している。クラスサイズが大きい場合では、難易度・課題分量と、総合評価との負の相関は明確になった。考えられる理由としては、クラスサイズが大きいことそれ自体のほか、サイズが大きくなりやすい要素、たとえば必修科目や教養科目のように一定数履修しなければならないといった科目の性質の影響などが考えられる。他方、履修者数が20名未満および回答数が20未満のクラスサイズが小さい場合では、難易度と課題分量が総合評価と負の相関は、弱いもしくは相関なしといえる程度の関係である。サイズが小さいゆえに教員から履修者への対応がしやすいことや、クラスサイズが小さくなる科目の性質の影響が考えられる。たとえば、専門科目は学生自身が興味をもち主体的に履修するため、必修科目等と比べて履修者数は少なくなりやすい。こうしたサイ

ズが小さくなりやすい要素もこの結果が得られた理由として考えられる。

また本分析では、科目を教養科目と専門科目に分け、各々において相関係数を計算することで教養科目と専門科目での相関関係を明らかにした。なお本分析でもゼミナール・卒業論文は除外されている。教養科目では総合評価は難易度と明確に負の相関関係にある。一方で、専門科目では総合評価と難易度と相関しない。より専門性の高い内容を扱う専門科目の難易度が高いことは当然であり、学生は専門性を高めるために特定の学部・学科に進学することを考慮すると、もっともらしい結果になっている。このことは、教養科目と専門科目では授業方法を変える方がよい可能性を示唆している。また総合評価と取組時間との関係をみると、教養科目では相関がないが、専門科目では正の相関関係となっている。これらの結果は、専門科目においては難易度の高さ・学習時間の多さは、必ずしも総合評価を下げないことを示唆している。一方、教養科目においては難易度の調整が必要となる可能性がある。

本分析では、全般的な相関関係が明らかとなった一方、クラスサイズの違いや教養科目と専門科目での違いがあることが示された。本報告が履修者の能力向上の一助となることを期待したい。

付録 アンケートの設問内容

【設問 1】	あなたがこの授業を履修した理由は何ですか 内容に興味があったから／必修科目だから／時間割上都合がよかったから／資格取得のため／その他
【設問 2】	この授業を受けて、授業の内容に興味や関心をもちましたか おおいにそうである／どちらかといえばそうである／どちらともいえない／どちらかといえばそうでない／まったくそうでない
【設問 3】	この授業の難易度は、あなたにとって高かったですか おおいにそうである／どちらかといえばそうである／どちらともいえない／どちらかといえばそうでない／まったくそうでない
【設問 4】	この授業に関する教員の指示(課題の提出方法など)は適切でしたか おおいにそうである／どちらかといえばそうである／どちらともいえない／どちらかといえばそうでない／まったくそうでない
【設問 5】	この授業で教員-学生間のやりとりは十分におこなわれていましたか(例えば、学生の報告や質問に対して教員が十分に評価や回答をおこなっていたか) おおいにそうである／どちらかといえばそうである／どちらともいえない／どちらかといえばそうでない／まったくそうでない
【設問 6】	この授業で教員は「in Campus」の LMS 機能を十分に活用していましたか。 (例えば、教材や課題が定期的に掲載されている、アンケートや小テストが行われている、教員と学生のやりとりが in Campus 上で行っているかなど。) おおいにそうである／どちらかといえばそうである／どちらともいえない／どちらかといえばそうでない／まったくそうでない
【設問 7】	この授業の資料はわかりやすいものでしたか おおいにそうである／どちらかといえばそうである／どちらともいえない／どちらかといえばそうでない／まったくそうでない
【設問 8】	この授業に関する課題分量について教えてください 多すぎる／やや多い／ちょうど良い／やや少ない／少なすぎる
【設問 9】	あなたは、この授業 1 回あたり、予習・復習にどのくらい時間をとりましたか 180 分以上～0 分(30 分刻み)
【設問 10】	あなたは、この授業 1 回あたり、課題にどのくらい時間をとりましたか 180 分以上～0 分(30 分刻み)
【設問 11】	この授業の内容は十分に理解できましたか 理解できた／どちらかといえば理解できた／どちらともいえない／どちらかといえば 理解できない／理解できない
【設問 12】	この授業の履修を他の学生に推奨できますか 推奨できる／どちらかといえば推奨できる／どちらともいえない／どちらかといえば 推奨できない／推奨できない
【設問 13-a】	この授業を総合的に評価して満足していますか 大変満足している／どちらかといえば満足している／どちらともいえない／どちらかといえば満足していない／まったく満足していない
【設問 13-b】	そうした評価をする具体的理由は何ですか
【設問 14】	この授業を受けて良かった点があれば、具体的に記入してください (例えば、配付資料が分かりやすい、in Campus から質問した内容を丁寧に返答してくれるなど。)
【設問 15】	この授業を受けて改善してほしい点があれば、具体的に記入してください
【設問 16】	授業評価アンケートの回答データは、千葉経済大学(以下、大学)で厳重に管理され、個人を特定できる形で公開されることはありません。 調査・研究のため、このデータを大学が認可した研究において利用することに同意されますか 同意する／同意しない

付録:表 1 アンケート項目の内容